

人材活性化

—オリックス野球に学ぶ—

取締役副社長

岡田 一

Hajime Okada
Executive Vice Presidents and
Director

競争原理の導入と規制緩和を柱とする、電気事業法改正から1年が経った。これを契機に電力各社では次々と、経営効率化に向っての諸方策が打出されつつある。とくに、電気事業法改正の背景には、電気料金の内外価格差の解消という社会的要請があったことから、各社とも、コストダウンを経営効率化の最重点課題として捉えている。

設備産業である電力事業としては、コストの主要部分を占める設備の建設・運転、保守に関する費用の低減を第一の課題として取り組んでいるが、さらに燃料費・人件費等比較的ウエイトの高いコスト要素についても、競争見積方式の導入拡大、組織・要員の合理化、高度情報処理システムの導入等により一層の低減を図っている。

コストダウンは、このように求める効用・価値、を出来る限り低コストで獲得するための方策であり、云わば企業体質のスリム化による成人病回避を目指すようなものである。しかし健康の維持増進の為には、スリム化と同時に鍛練と強化が欠かせない。

経営効率化のもう一つの課題は、経営資源の活性化である。とくに重要な経営資源の一つである人材の活性化である。人間を人件費支出の対象としてとらえれば、それを節減することがその目標となるが、人材という資産としてとらえれば、有効活用を図ることこそが目標とならねばならない。

さて、今年のプロ野球日本シリーズは大方の予想を覆して、オリックスが巨人に快勝し、チャンピオンの座についた。“仰木マジック”と呼ばれるオリックス仰木監督の用兵の妙と、“全員野球”と評されるオリックス各選手の持味を出し切ったの見事な勝利であった。シリーズ後の或る日の新聞のコラムに、「仰木マジックの秘密は科学だ。選手個人の能力を見抜き、それぞれの特性をつかみ、データに基いて起用する仰木野球はいわゆる管理野球ではなく、個性重視の役割野球だ」



と書いてあった。

第1戦・第2戦をテレビ観戦していて、仰木監督の指揮官としての手腕につくづく感じ入った。オリックスの選手と云えば、天才と呼ばれるイチロー選手以外はこれと云って目立った選手はいない。しかも、多くの選手が他球団から放出される形で移籍してきた人達である。監督・コーチ・主力選手の大部分が球団生え抜きのスター選手ぞろいの巨人と好対照である。その云わば脇役選手達を監督は自由・自在に起用し、選手はその場面・場面での自らの役割を確実に果していた。

巨人の強力打撃陣をオリックス投手陣がいかに抑えるかが、勝負の見所であったが、オリックス仰木監督は、11名の投手を先発、中継ぎ、抑えにと役割分担を明確にフル活用し、完全に巨人打線を封じ込めた。4名の投手がそれぞれ1勝ずつして、他の7名は完全に脇役としての役割を分担した。

法隆寺大工の口伝に、「塔組みは、木組み」「木組みは、木のくせ組み」「木のくせ組みは、人組み」というのがあると聞いている。堂塔を構築するには、木のくせを見て、その特性を生かした組み方をする必要がある。そのためには棟梁に従って、全ての大工が心を一にして取り組みねばならないとの教えである。

オリックス仰木野球もこれに通ずるものがある。人材と云う面から見ると、オリックスの選手達は、必ずしも一流揃いではないかも知れないが、監督の人材を見抜く眼力、およびそれを生かす技術、その裏付けとなる情報・データ、これらによって緻密に構成されたシナリオに従って、選手達が見事にマジックの演じ手となった。

当社としても、折角の貴重な経営資源である人材を活性化し、戦力強化につなげたいものだが、それを考えるうえでも学ぶところのあるオリックス野球であった。